

タイトル	2020 年度 推薦入試 共同教育学部（教育専攻）小論文
評価のポイント	<p>歴史学者が執筆した「解るといふこと」に関する文章を題材とした問題である。大学時代のゼミナールでの学習から、「知る」とは異なった意味での「解る」ということについて考察されている。この文章をもとに、教育研究でも頻繁に扱われる「解る」というテーマについて考えさせることをねらいとした。内容を理解したうえで、この内容に即して自分自身の経験を整理し直して論じることが求められる。</p> <p>評価に当たっては、次のような点を特に重視した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「解る」ということについて、「知る」ということと異なり、「自分が変わる」「自分自身が何がしか変わる」といった内容のことが書けているか ・文章に即した形で「解る」という経験を取り上げられているか ・その経験を読み手に理解できるように説明できているか ・その経験を通じて、どのように「自分が変わったか」が説明できているか <p>出典：阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』筑摩書房、1988年、pp.16-17</p> <p>小論文解答例</p> <p>筆者のいう「解る」とは、「それによって自分が変わる」ということである。その意味で、単に「知る」とは異なり、自分の人格にかかわってくるものである。</p> <p>私は高校1年生のある授業で、先生が「君たち、自分の力でこの高校に入れたと思っているかもしれないけれど、それは違う」といっていたことを覚えている。それなりに受験勉強にも取り組み、その結果として志望校への合格を果たしたと感じていた私は、最初、この先生の発言の意味がわからなかった。しかし、その先生は、さらにこのように続けた。「君たちのなかで、みかん箱をひっくり返して、机の代わりにして勉強してきた人はいないだろう。机も、勉強部屋も用意してもらい、塾や通信添削も好きなだけ利用させてもらって、勉強してきただろう。しかし、世の中には、こうした環境を用意してもらえない人も少なくない。その意味では、君たちは自分の力だけではなく、親御さんたちの存在があったからこそこの高校に入学できたんだ。そのことを忘れてはいけない」。</p> <p>この先生の言葉を聞くまで、自分が恵まれた環境にいたことに、まったく自覚がなかった。受験や、その結果である学歴は、その人の能力や努力の結果だと思っていた。地元では、それなりに高く評価されている高校に入学した私は、自分には高い能力があると過信しているところもあった。もちろん、受験や学歴が、能力や努力によって左右される部分是否定できない。しかし、能力や努力をしていたとしても、家庭環境によって、自分が望む進路を選べないこともある。そのことを、当時の私はまったく考えたことがなかった。</p> <p>気づけば周囲の同級生も、多くが経済的な困窮とは無縁の生活をしているようだった。それ以来、学力や学歴は、単純にその人の能力を示す指標ではないと捉えるようになった。この先生の言葉によって、私は学力や学歴の別の側面が解るようになり、社会の見方が変わることとなった。（794文字）</p>